

activity. We speculate that these differences may be related to the population mobility levels of the past generations.

【Key Words】 Story telling styles, Sub-culture differences, Joint action, Scaffolding

はじめに

人間は社会的な問題解決場面に置かれたとき、そこから必要な情報を抽出し、適応的な対処方略を選択することが求められる。子どもが社会的にコンピテントな成員となるための準備として、おとなとの相互行為をとおしてさまざまな場面への対処のしかたを学習していくものと考えられる。そこでは、おとなの具体的な対応や子どもの反応へのフィードバックがひとつの適応モデルとして機能するというように、おとなは子どもの学習を媒介している(Heath, 1983)。対処の判断をする際に、場面からどのような種類の情報を抽出し、そこから欠けた情報を想定してどのような一連の物語をつくり文脈全体を意味づけしていくかには個人差がある(東, 2002)。子どもは親との共同行為に参加することでその生活文化固有の語りのスタイルに触れ、認知的枠組を獲得していく。とくに、他者の行為や出来事をどのように語るかは、文脈全体の一貫性や視点を明確にして認識を形成するための文化的道具(cultural tool; Wertsch, 1991)として機能するものである。

Fivush & Wang(2005)はアメリカと中国の母子の語りのスタイルの違いを比較した研究をおこなっている。アメリカの母親は他者の情緒に触れたときに、子どもにその原因に焦点をあてて自分の意見や感情状態を述べるよう求めることが多かった。それに対して中国の母親は、子どもに情動的経験を他者と共有し、情緒を社会的行為の結果ととらえることを求める頻度が高かった。前者は他者の行為の原因を論理的に理解し表現するという語りのスタイルをとり、後者は道徳的観念に照らして自己批判をしたり適切な行動を探索したりするというように、地域により情緒について語るスタイルの違いがみられた。

また、線画を間に置いた中国と日本の母子の会話の比較研究(Kakinuma, Uemura, Jing, Jin, & Mayuzumi, 2005)では、日本の母子が行為者の意図や感情について複数の可能性を考慮し、行為の結果の解釈を善意に求めることが多いことが示された。それに対して、中国の母子会話では行為者の意図を悪意に解釈してそれがもたらす結果を事例として提示するケースが多くみられた。前者では人間関係の解釈を善意に求め対処を考えることから、社会的関係の葛藤を避ける傾向が示された。後者は悪意をもった行為がもたらす結果を明確に提示することで、親子の会話場面をトラブル回避のための道徳的判断を子どもに身につけさせる訓練の機会としていると解釈された。

このような語りの違いは日本国内の地域差にもみられた(上村・柿沼, 2004)。人の流動性の高い地域に暮らす東京の母子は、状況を他者との人間関係に帰属させるだけでなく、並列的に多様な選択肢が語られ、その中で子どもに可能性の高そうなひとつを考えさせるという形式をとることが多かった。一方の流動性の低く人が長くその土地に暮らす山形では、人間関係の対立を暗示する場面において、状況を解消することについては語っても、対立の原因を暗示する対象物に言及することは避ける傾向が示された。そこには、それぞれの生活環境に適応する上で必要となる情報が選択されると同時

に、人間関係についての状況の解釈や対処方略の枠組みが提示されているものと考えられる。子どもは、こうした親との語りという共同行為に参加することによって、適応的なもの見かたや語りのスタイルを獲得していくことが予測される。

本研究では、トラブルを暗示する場面が描かれた線画を提示し、他者の行為の意図や問題解決方略について、東京、山形(庄内地方)、沖縄(本島)のそれぞれの地域の母子の発話のスタイルがどのように構成されるかを明らかにすることを目的とした。具体的には、1)母親が線画の問題状況、その原因の帰属および解決をどの程度の頻度で言及したか、また、2)母子の語りの中で、子ども自身はどの程度それらの内容に触れたかについて、それぞれの地域で差異がみられるかを検討した。他者の意図や解決法など焦点をあてた語りの構成要素について、対象者全体の中でそれぞれの地域でそれらに触れた母子の比率と、子どもの発話スタイルの獲得を、3つの地域を代表する母子の語りの構成を分析することによって検討した。

方 法

対象者： 東京 20 組，山形 20 組，沖縄 16 組の 3 歳から 5 歳の子どもとその母親を対象とした。それぞれの地域の紹介者を介して依頼をし、承諾の得られた母子について参加を求めた。

課 題： Wakabayashi, Fernald & Kakinuma (1999)で使用した 4 枚の線画を刺激として提示し、柿沼・上村(2003)の手続きと同様に、時間の制限や絵の順番などを含めとくに制限をせずに母子に自由に語ってもらった。本研究では、4 枚の絵のうちの「はしご」について分析をおこなった。課題は、対象者の自宅、友人宅、保育所など子どもが日常的に慣れている場面で実施した。ことばに関する母子の違和感をできるだけ回避するために、山形と沖縄では市内に在住の女性に方言で教示してもらった。線画および実施手続は柿沼・上村・静・金・黛(印刷中)と同様であった。

言及内容の検討： 母子の発話を表 1 の分類でコーディングをおこなった。画面の直接的な状況説明で、「茶碗の状況」、「茶碗の結末」、「他者の行動」への言及があるかどうか、また、状況に対するひとの関与として、「行為者の善意」、「行為者の悪意」、「状況への対処」、「自己の経験」への言及があるかどうかを調べた。これらのカテゴリに該当する発話がひとつでも示された場合にカウントし、全対象者のうちの何名がそれらを言及したかという比率を算出した。

表1 「はしご」場面の語りのコーディングカテゴリ

発話カテゴリ	内容	事例
茶碗の状況	茶碗が落ちたことに触れる	子どもがお茶碗を落とした
茶碗の結末	落ちた茶碗がどうなるかに言及する	食器が割れた
他者の行動	母親が何をしているかに触れる	仕事をしていた子に気づかない
行為者の善意	手伝いをしている間の出来事とする	お母さんに言われて取ろうとした
行為者の悪意	いたずらやつまみ食いを原因とする	つまみ食いをしようとした
状況への対処	トラブルの対処について言及する	お母さんが拾って直してくれる
自己の経験	対象者の経験や対象者ならどうするか	だったらお母さんに謝る

結 果

母親の言及内容： 「はしご」場面の線画については図2に示されるように、「他者の行動」の言及の比率に有意差が示された ($\chi^2(2)=6.78, p<.05$) 以外には、線画に関する母親の語りの内容についての地域差はみられなかった。東京の母親は、画面の直接的状況について触れ、比率はやや落ちるものの「行為者の意図」や「状況への対処」、「自己の経験」についても言及がみられた。山形の母親は、「茶碗の結果」、「状況への対処」や「自己の経験」に触れる頻度は東京の母親に比べて少なかった。沖縄の母親は、「他者の行動」への言及が少ないほか、「茶碗の結果」や状況に対するひとの関与への言及の比率は全体的に少ないという特徴がみられた。3つの地域の母親の発話の全体量は東京、山形、沖縄の順であったが、各カテゴリの生起の全体の傾向については類似性が高かった。

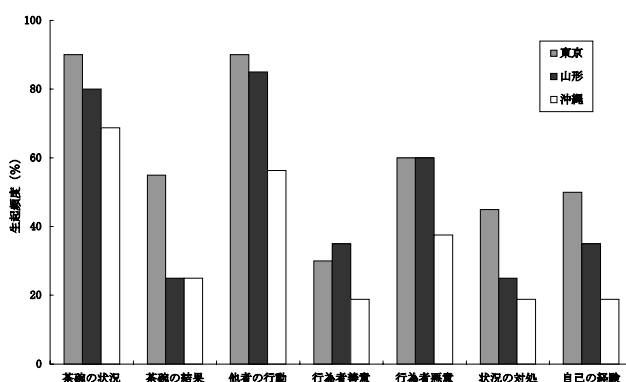


図2 「はしご」場面における母親の言及内容

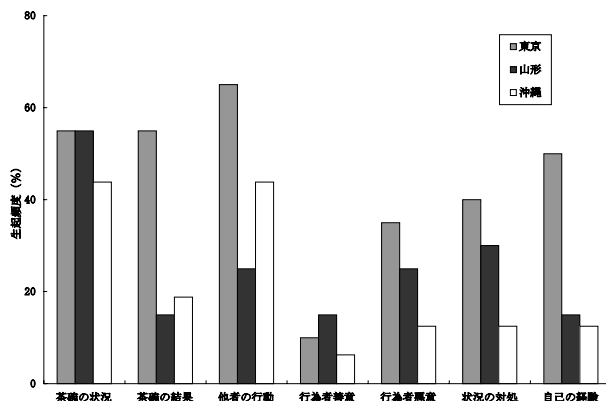


図3 「はしご」場面における子どもの言及内容

子どもの言及内容： 子どもの発話については図3に示されるように、「茶碗の結果」($\chi^2(2)=9.00, p<.05$), 「他者の行動」($\chi^2(2)=6.48, p<.05$), 「自己の経験」($\chi^2(2)=8.58, p<.05$)に有意差が示された。東京の子どもは、場面の状況については60%前後が言及していた。それに対して、「行為者の悪意」や「自己の経験」など状況に対するひとの関与の言及の比率は低くなるが、「行為者の善意」以外はそれぞれのカテゴリへの言及がみられた。山形の子どもは、「茶碗の結果」、「他者の行動」、「自己の経験」についての言及の頻度が低く、場面状況への関与については「行為者の悪意」と「状況への対処」についてのみある程度の言及があった。沖縄の子どもは、場面状況の直接的説明の言及はあったが、状況のその後や原因など線画に直接みえない内容についてはほとんど言及しなかった。

語りスタイルの地域差： 母子が共同で構成する語りスタイルを地域ごとに比較するために、言及内容の項目がそれぞれの地域特性を表していると考えられる事例を選択し、「はしご」場面についての語りの内容項目の提示のしかたおよび母子の発話構成の特徴を検討した。

まず、沖縄の母子の語りは、場面状況について直接的に述べることを中心に進められていた。事例1では、母親が登場人物と対象物に関する質問を投げかけ(1-1, 1-3, 1-5)、子どもがそれに応答する(1-2, 1-4, 1-6)という形をとって会話が進んでいた。事例2では、子どもの発話(2-1)に対して母親が反復、補足していた(2-2)。このようなやりとりは事例1にもみることができる(1-6, 1-7)。

<事例1 沖縄の母子の質問と応答(JK0-6)>

- | |
|----------------------|
| 1 M: これ誰? |
| 2 C: お母さん。 |
| 3 M: これは? |
| 4 C: 子ども。 |
| 5 M: 子ども, これは? |
| 6 C: 皿, 落ちた。(茶碗の状況) |
| 7 M: お皿が落ちてる。(茶碗の状況) |

<事例2 沖縄の母親の反復(JK0-7)>

- | |
|--|
| 1 C: 御飯取ろうとしてる。 |
| 2 M: うん, お茶碗取ろうとして落としちゃったんだ。 |
| 3 C: うん。 |
| 4 M: ね, そうだね。お母さんが台所にいるね。ん。
(他者の行動) |

< 事例3 東京の母子の意図の解釈と自己経験の言及(JK -2) >

- | | |
|----|---|
| 1 | M: お母さんがお皿取ってって言うてるのかも知れない。(行為者の善意)でも、本当はこれ、つまみ食いかも知れない、団子。(行為者の悪意) |
| 2 | C: 納豆だ。 |
| | (中略) |
| 3 | M: 何作ってんだろうね。(他者の行動) |
| 4 | C: 目玉焼き。(他者の行動) |
| 5 | M: うん、目玉焼き、あ、そう目玉焼き。固いのがいい?(自己の経験) |
| 6 | C: 固いの。(自己の経験) |
| 7 | M: あ、固いの、あらそうですか、ふーん。目玉焼き焼けるからさ、お皿取ってって言って、できました。そしたらお菓子を発見したんだよこの子。それで、お菓子、お母さん見えないから、食べようと思ったの。そしたら、お皿落としちゃった。(茶碗の状況) |
| 8 | C: パパーンてわ、割れると、こらー。(茶碗の結果) |
| 9 | M: そう、でも割れてないけど。急いで取りに行って戻しとこっか。(状況への対処) |
| 10 | C: ひひひ、ふゆんふゆん。 |

東京の母子(事例3)では、場面の状況を引き起こした行為者の意図を母親が異なる視点から挙げていた(3-1)。このように状況に関する複数の原因を選択肢として提示するのは、東京の母子の語りの特徴と考えられる。また、他者の行動に関する質問(3-3)によって子どもの注意をそちらに向け(3-4)、子ども自身の自己経験についても同様のやりとりをしていた(3-5、3-6)。母親は画面の状況に至るまでのストーリーを再提示して茶碗が落ちたことに言及し(3-7)、結果的に茶碗が割れたことに関する子どもの言及(3-8)を誘導したものと考えられる。子どもの「こらー」という発話(3-8)は、茶碗を落としたことを咎められることを暗示しており、これは悪意という解釈(3-1)を受けた結果であるとも伺えた。さらに、これは母親のその後の対処についての言及(3-9)につながっていると考えられる。

山形の母子の語りの内容は、茶碗が割れるという状況の好ましくない結果に直接触れることは少ない一方で、行為者の意図についてはネガティブな側面をはっきりと述べる傾向がみられた。事例4では、母親が行為者の意図や他者に触れ(4-1、4-3、4-7)、子どもはそれを受けて行為の対象物である団子(4-4)や他者の行動(4-8)に注意を向けた発話を発していた。また、事例5では、母親が茶碗の状況に関する質問を投げかけたが(5-1)、子どもはそれに対する直接的な応答はせず、やりとりをとおして行為対象に言及した(5-4)。さらに、母親によって子どもに対して場面状況への対処についての質問がされた(5-7)。

3つの地域で共通して示される発話構成の特徴は、母親が子どもに対して質問を発してそれに応答させることと、子どもの言及を母親が反復することによって、子どもが自身の語りを構成するための問題の所在およびその原因や対処に注意が向き、親の発話を受けたり部分的に反復したりすることで語りに参加していたことであった。

<事例4 山形の母子の意図の解釈への言及

(JY -10) >

- 1 M: お母さん何してんの、ん、何をしようとした？
ん？(他者の行動)
- 2 C: あ
- 3 M: 取ろうとした・・・お母さんがあ、横で御飯作っ
たりしてる時、そうと・・・取ろうとした。
(対象者の悪意)何だこれ？
- 4 C: 団子。
- 5 M: 団子、そしたら・・・
- 6 C: 茶碗。
- 7 M: 落としてしまった、お母さんさ、気づか・・・
(他者の行動)
- 8 C: 気づかんねえかなあ。(他者の行動)

<事例5 山形の母子の状況対処の言及

(JY -8) >

- 1 M: 何落とした？(茶碗の状況)何が・
したのかなあ。
- 2 C: このひ、これ。
- 3 M: 何だろ？
- 4 C: ブドウ。
- 5 M: えー、ブドウ？ふいふ、食べようとし
たんだ、きっとこれも。
- 6 C: そうだよ。
- 7 M: ほら、お母さん。ふいふ・・・しちゃ
わない。ほんでどうする、戻すここ
に？(状況への対処)

考 察

本研究では、東京、山形、沖縄の母子の語りのスタイルの違いを明らかにするために、家庭でのトラブルを暗示する「はしご」場面の線画を提示して、母親と子どもそれぞれが語りの中でどのような情報に触れ、共同でどのような語りを構成していくのかを検討した。

語りのカテゴリの比率からそれぞれの地域を比較した結果、母親の発話内容については言及の頻度は東京、山形、沖縄の順に高かったが、それぞれのカテゴリに言及する相対的な傾向は、沖縄の母親が「他者の行動」への言及の比率が低かったことを除いて、3つの地域で大きな違いは示されなかった。子どもの発話には母親よりも地域差がみられ、東京の子どもは「行為者の善意」を除く各カテゴリにはある程度触れているのに対して、沖縄の子どもは「茶碗の結果(割れる)」と、この場面状況へのひとの関与(行為者の意図や自己の経験)にはほとんど言及しなかった。山形の子どもは、「茶碗の結果」と「他者の行動」への言及の比率が低いほか、状況へのひとの関与への言及については東京と沖縄の間という傾向を示した。

語りの内容は子どもの発話に差はみられたものの、同じ「はしご」場面の線画に対する中国の母子の語り内容との比較といった観点(Kakinuma et al., 2005)からみるとそれほど大きいものとは言えない。行為者の悪意やその行為によって誘発する悲惨な結果を提示し、それをネガティブなモデルとして子どもに予測されるトラブルを回避させるという中国の語りスタイルと比較すると、行為者の善意にも目を向けて状況の対処に触れるという日本の特徴は、それぞれの地域に共通して示された特徴であったと言える。しかし、「茶碗の結果(割れる)」ことへの言及の比率は、明らかに東京と比較して山形、沖縄の母子では低く、行為者の悪意や状況への対処に言及はしても、場面の状況から予測される結果としてのトラブルについてはあえて言及しない傾向がみられた。このような国内における

語りのスタイルの差異は、上村・柿沼(2004)および柿沼・上村(2003)における「泣いている子」場面と「砂場」場面の語りにも類似した傾向がみられた。すなわち、人の流動性が高く他者との関与の密度の希薄な地域では場面から予測できる可能性に多角的に触れ、その対処を考えるのに対して、人の流動性が低く他者との関わりの濃密な地域では、人間関係の葛藤を暗示する対象物や結果の明言を避けて問題解決に触れるというコミュニケーションスタイルをとっていた。

以上のような解釈の背景には、東(1994)の日米の道徳的判断の違いの説明が援用できよう。人が運命的に結びついて共存している社会では、他者とのはっきりとした対立が社会的緊張をもたらすことになりやすく、顕在的な対立によってコミュニティ全体が慢性的な争いに組み込まれることを避けるために対立を避け、それをできるだけ表立たせないようにする適応機制がある。そうしたスタイルは、人が自由に離合集散できる社会のスタイルとは大きく異なることが推定される。日本国内においても人の出入りが多様な東京からみると、相対的流動性の低い地域に生活する人は、人間関係の対処においてこのスタイルをとる可能性があるものと考えられる。東京のスタイルは、状況における関係要素を一通り客観的に押さえ、複数の可能性の中からひとつを選択するというものであった。一方、山形および沖縄では状況のトラブル内容には触れないというスタイルを取り、山形ではどうすれば問題に対処できるかを重視する傾向が、沖縄では状況の中の明確な部分にのみ焦点をあてて見えない部分には言及しない傾向が伺えた。

さらに、母子の語りの構成をそれぞれの地域の代表的な事例から検討した結果から、3つの地域の子どもの語りのスタイルの獲得における共通性が示された。子どもの発話は、いずれも母親の質問やフィードバックによって発話を促進され、語りに参加させられる。さらに、母親の発話を部分的に反復したりそれに異を唱えたりすることもあり、語り場面全体は母子が相互依存的に構成するいわば共同行為であると言える。その中に、出来事の時系列的関係や行為者の意図、状況の対処、自己の経験をどこまで入れ込んでいくかという語りのスタイルの形成は、母親によって主導的に進められると言えよう。子どもが参加する母子の語りという共同行為の中では、問題状況や状況の選択、対処のしかたについてのスクリプトを獲得するための足場づくり(scaffolding; Bruner, 1986)がなされているのである。

日常生活の中で出会う多様な問題に対して、子どもが入手可能な情報から状況を判断し対処するためのスクリプトは、このようにそれぞれ適応すべき文化環境に応じて形成され獲得されると考えられる。他者の行為、意図、出来事のどの部分に触れ、それをどのような順番で記述するかという語りのスタイルは異なるが、おとなたちは質問、反復、フィードバックによって、子どもの足場をつくり語りの共同行為の中に巻き込んでいくことでこの認識の枠組みである文化的スクリプト(東, 2006)を形成させるというやりかたには、それぞれの文化に共通点が示された。子どもの側の視点からみれば、彼らが生活する文脈における情報選択と理解のための枠組みであるスクリプトの獲得には、語りのスタイルという道具立てが重要な機能を果たしている。彼らはこうしたスクリプトがうまく提示されている語り(文化的道具)を適切に使用(消費)することで、適応的な判断や行動ができるようになるのである。いずれ援助の範囲が縮小され、判断の責任が子どもに移行される方向に足場はずされて、彼ら自身が有能な文化の担い手となっていく(Bruner, 1986)。まさにこうした過程のなかで文化的ス

クリプトを考えると、これは共同行為の中で獲得されていくというメカニズムは共通であり、文化環境に合わせて使用され形成されるという意味においては、文化的スクリプトは固定したものではなく行為の結果であり常に構成・再構成されていくものと考えられる。

引用文献

- 東 洋. (1994). 日本人のしつけと教育-発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会.
- 東 洋. (2002). 社会的判断の国内下位文化による変動の研究: 文化間変動因と文化内変動因の交差妥当性の試み. 平成 11 年度-平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告者, 1-v.
- 東 洋. (2006). ライフ・スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ. 平成 14 年度~平成 16 年度科学研究費補助金研究成果報告者, 1-11.
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fivush, R. & Wang, Q. (2005). Emotion talk in mother-child conversations of the shared past: The effects of culture, gender, and event valence. *Journal of Cognition and Development*, **6**, 489-506.
- Heath, S.B. (1983). *Ways with words: Language, life, and work in communities and classrooms*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- 柿沼美紀・上村佳世子. (2003). 母親の語りに見られる地域差(2) - 東京と沖縄の発話構成, 共同作業としての語りの比較 - . 発達研究, **17**, 87-96.
- Kakinuma, M., Uemura, K., Jing, J., Jin, Y., & Mayuzumi, M. (2005). Mother's moral messages to her children through story-telling sessions: Chinese values judge right and wrong, Japanese morals emphasize harmony. *Poster presented at Childhood 2005 Oslo, Norway*.
- 柿沼美紀・上村佳世子・静進・金宇・黛雅子. (印刷中). 文化的学習としての母子の語り(1) - 日本・中国・米国における非言語的情報選択. 発達研究, **20**
- 上村佳世子・柿沼美紀. (2004). 母親の語りに見られる地域差(3): 東京と山形の発話構成の比較. 発達研究, **18**, 125-135.
- Wakabayashi, T., Fernald, A., & Kakinuma, M. (1999). What, how and why?: Japanese and American mothers' questions in joint storytelling sessions. *Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN*.
- Wertsch, J.V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge: Harvard University Press.

<謝 辞>

本研究の調査にご協力をいただいた保育所の職員の方々はじめ、保護者、園児の皆さんに御礼申し上げます。また、格別のご配慮をいただいた琉球大学の島袋恒男・嘉数朝子両先生、阿部医院の阿部寿美子先生に、心より感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（B）「行為の理解，推測，評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト：日・米・中比較研究」（課題番号：14310062；研究代表者 東 洋））の助成を受けて実施された。